［巻頭インタビュー］

オオキ建築事務所

大木啓幹

代表

「新常態への対応をいち早く」

ホール建築 コロナ後の指針

昨年から今年にかけて2つの国際的な建築賞を受賞したオオキ建築事務所の代表で一級建築士の大木啓幹氏。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、建築の専門家としての知見をいち早く発信して注目を集めた。その大木代表にコロナ後のホールづくりの指針を聞いた。

――新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、遊技産業全体が大きなダメージを受けました。いまの状況をどう見ていますか？

大木　この先2年ぐらいは様々な業種で新型コロナの影響を受け続けることは避けられません。当然、2年経って3年目から元に戻るかと言えば、完全に元には戻らないでしょう。とくにパチンコ関連では、休業要請が出た地域で休業しない店舗が連日メディアに取り上げられたことで、国民の業界に対するイメージが非常にネガティブになってしまいました。今後は業界全体でこのネガティブイメージを払拭するための努力が求められます。とはいえコロナ以前とはステージが変わったことを認識しなければなりません。新型コロナを契機とした人々の行動変容は、これからの新常態（＝ニューノーマル）となります。コロナ前の「普通」の状態に戻すのではなく、「新常態」に対応した店舗をいち早く創り上げる必要があると思っています。

――コロナをめぐる報道では、パチンコホールが密閉空間であるというイメージが強調された面があります。

大木　そもそも30年ほど前まで、日本のパチンコホールは開放的な店づくりをしていました。まだ覚えている方も多いと思いますが、店舗の入口の上に看板があって、ガラス張りの入口のドアはいつも開いていて、島の様子を外からうかがい知れるような設計でした。例えると、焼き鳥屋さんが店頭で焼き鳥を焼いて、美味しそうな香りにお客さんが寄ってくる、そんな感じで会社帰りにちょっと寄っていこうというお客さんを呼び込めた。当時はそれでよかったのです。店内が閉鎖的で、中で何やっているかわからないお店では通用しなかったと思います。

――それが閉鎖的になっていった理由は？

大木　私は1978年から1981年まで、アメリカ・ロサンゼルスの大学で建築を学んでいて、よくラスベガスのカジノを見に行っていました。当時のラスベガスのカジノは開放的だった。室内は閉鎖的な部分もありましたが、『シーザーズパレス』や『ハラス』など当時有名だったカジノは、外観は完全に内部の雰囲気を表に出していたのでわかりやすかった。そんなカジノを従来とはまったく違う形にしたのが、スティーブ・ウインが手掛けたカジノホテルでした。1988年にオープンした『ミラージュ』にはじまり『トレジャー・アイランド』、『ベラージオ』などが大成功を収めました。1990年代に起こったこの変革は、世界中のゲーミング産業に大きな影響を与えました。

――その流れが日本にも及んできた？

大木　私がラスベガスのカジノのトレンドを参考にして、外に対しては閉鎖的で内部は開放的なパチンコホールづくりにすべて変えていったのです。それがその後のパチンコホールのスタンダードになっていきました。店舗を大

続きは月刊アミューズメントジャパン7月号をご覧ください